市川三郷町
のっぷい魅力化プロジェクト2019
実施報告書

2019.9.13(金)～9.15(日)
山梨県市川三郷町

四尾連湖の景色

CONTENTS

ご挨拶　東京富士大学　准教授　渡辺 泰宏 …… 1

写真レポート …… 2

Ⅰ．市川三郷町のっぷい※魅力化プロジェクトについて

1. プロジェクト実施概要 …… 4

2. 主催者からのメッセージ　プロジェクト実行委員会　市川三郷町役場　塩島 実 …… 5

Ⅱ．大学生からの提案

1. 職人の町　市川三郷町(Aチーム) …… 6

2. 市川三郷町芸術祭　山と伝統文化の「悦び」の町(Bチーム) …… 8

3. クセが強い町、市川三郷町(Cチーム) …… 12

Ⅲ．プロジェクトを振り返って

1. 学生たちの感想 …… 14

2. 町の皆様からの感想 …… 16

3. コーディネーターから(一般財団法人 日本総合研究所)

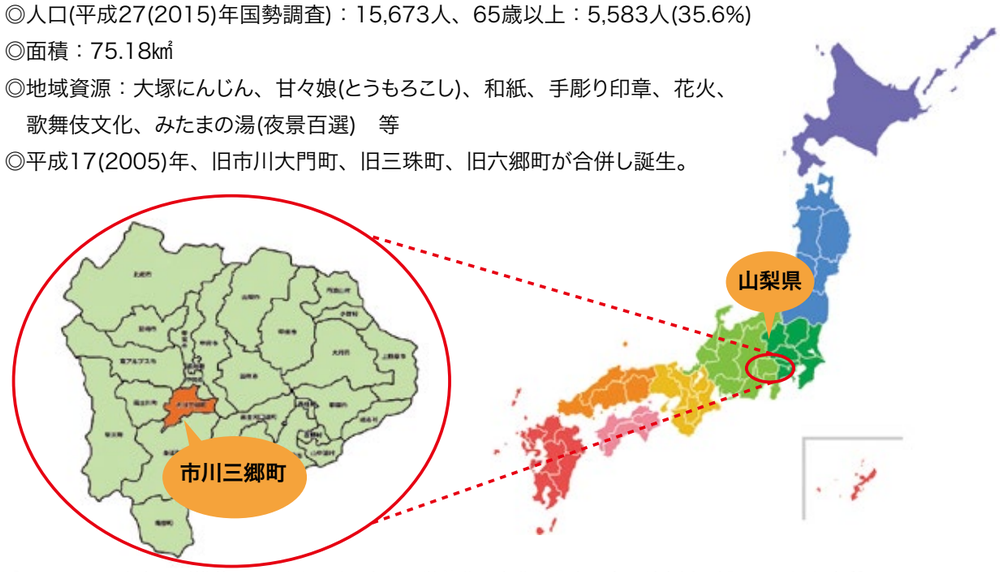
地域と人、「伝えたい」と「知りたい」の貴重な出会い(研究員　髙野 祥代) …… 19

住民の感想と学生の成長を受けて(特任研究員　黒田 秀雄) …… 20

プロジェクトの軌跡と今後の展望(主任研究員　内田 誠一) …… 21

山梨県市川三郷町について

◎人口(平成27(2015)年国勢調査)：15,673人、65歳以上：5,583人(35.6%)
◎面積：75.18㎢
◎地域資源：大塚にんじん、甘々娘(とうもろこし)、和紙、手彫り印章、花火、
　歌舞伎文化、みたまの湯(夜景百選)　等
◎平成17(2005)年、旧市川大門町、旧三珠町、旧六郷町が合併し誕生。



※「のっぷい」：火山灰が堆積してできた、きめ細かく栄養分や水分を豊富に含んだ市川三郷町の肥沃な土質のこと

ご挨拶

東京富士大学　准教授
企業ビジネス研究同好会　顧問
渡辺 泰宏

地方創生の取り組みである「わがまち魅力化プロジェクト」は今年で4年目を迎え、活動の場を山梨県市川三郷町に移し、今年度は「市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクト」として実施されました。本プロジェクトの目的は、都会で学ぶ大学生が、都会の喧騒を離れ田舎の生活を体験する中で地域の魅力を発見することにあります。そして学生たちにとっては、地方の現状を知り、大学での学びを深める実践的な学習の場となっています。

本報告書にまとめられたように、参加学生たちは、フィールドワークによって市川三郷町の皆様とふれあい、地域の様々な魅力を巡りました。市川三郷町は、「のっぷい」とよばれる肥沃な大地とそこで収穫される農産品、そして印章、和紙、花火などの伝統産業があり、地域ならではの資源が数多くある町であることが明らかになりました。一方、農業や林業の後継者不足、中山間地域の人口減少、特に若い子育て世帯の減少、情報の発信力の弱さなど、町が抱える課題についても明らかになりました。

今回設定されたテーマは、「市川三郷町のブランド化」の考案です。学生たちの各グループを仮想の「地域商社」として、地域の魅力を掘り起こしながら、町のブランドコンセプトを提案し、それを確立するための事業計画を提案するという難題でした。フィールドワークを通じて最終的に提案された3つの事業計画は、市川三郷町に点在する魅力ある資源を一つにつなぎ合わせることが意図されています。それぞれの地区で育まれた産業や文化の魅力を結集して、市川三郷という「ひとつの町」の魅力をいかに発信していくかが考案されました。

学生たちの提案内容は、地域の文化や歴史をふまえながら、長期的な視点で社会を持続的に発展させていこうというものです。このような発想のもと市川三郷の将来を考えれば、それぞれの地区の独自性を活かしながらも、となりの人(地区)と手を取り合おう、協力して何かを行おう、という意識や行動が必要であるように思われます。地域の多様性を育みながらいかにして持続的に発展するか、これは日本の多くの地域が抱える共通の課題であると言えます。

本プロジェクトが貴重な学びの場となったのは、このプロジェクトを支えてくださった市川三郷町役場の皆様、地元企業や住民の皆様、地域おこし協力隊をはじめ関係団体の皆様、そして日本総合研究所の皆様、その他多くの関係者の方々のご協力のおかげです。このプロジェクトをきっかけとして、「のっぷい」の肥沃な地で、新たなアイディアや活動の芽が育まれることを願っております。

PHOTO REPORT 2019.9.13 - 2019.9.15

オリエンテーションは、市川三郷町役場で実施。お世話になる町の皆様と参加学生の顔合わせ。
オリエンテーション後はさっそく車に乗って目的地へ移動！

市川東小学校では、小学生1～6年生10名と参加大学生10名で
コミュニケーション囲碁。小学生の圧勝でした。

2日間とも、入浴は温泉施設「みたまの湯」を利用。夜景百選と日本夜
景遺産を全国初W認定された県内外から広くお客様が訪れる施設。

朝の四尾連湖
忘れられない美しさ

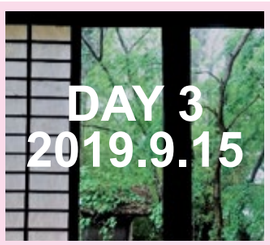
シャインマスカット収穫体験の後は、農協共撰所で農業の現状を
ヒアリング。

山道の先の、古民家で移住者の
方から話をうかがう。

和紙ができる瞬間を間近で見る
ことができた。

折染め体験。
想い想いの色に和紙を染める。

はなびかんで、国産花火の品質の高さと、こだわりについてうかがう。



プレゼン風景・Aチーム

プレゼン風景・Bチーム

プレゼン風景・Cチーム

六郷町民会館へ。

印章の歴史と篆刻の方法を教わった後、それぞれで黙々と彫る。
自分で彫ったあとは、職人さんのチェックと仕上げ。「彫り方で性格が分かる」と、職人さんからの言葉。

宿泊場所「水明荘」で、みんなで花火を楽しむ。
そのあとは、翌日に向けて打ち合わせをしてから就寝。

手づくりの楊枝、お父さんのこだ
わりが詰まった宝物をいただく。

買物が難しい町民のところへ移動
販売をしている星野商店・星野さん。

のっぷいの土で育つ大塚にんじん
の畑。収穫は冬。

金長特殊製紙で社長と専務のご案
内により、機械漉き和紙を見学。

まち歩きで町の中心の商店街へ。
昔ながらのかき氷屋さんで話を聞く。

フィールドワークを一通り終えて、グループディスカッションへ。
「印象に残ったことは」「コンセプトをどうまとめよう」熱心に話しあう。

夜は、ちかはぎ空の家で夕食と
交流会。町民と囲炉裏を囲む。

プレゼンには、多くの方が集まってく
ださった(市川東小学校・体育館)。

プレゼンお疲れ様！ちかはぎ空の
家で、お別れの挨拶。

高台にある眺めの良いレストラン「イルポッジョ」で
疲れを癒し、昼食と振り返り会。

Ⅰ. 市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトについて

1. プロジェクト実施概要

◆内容

都市部の大学生が、過疎の町である市川三郷町に滞在し、町民や事業者との交流やフィールドワーク等を通じて、地域の魅力や課題を考える。

◆実施体制

主催：市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクト実行委員会

協力：市川三郷町、東京富士大学企業ビジネス研究同好会、一般社団法人IGOコミュニケーションズ、一般財団法人日本総合研究所

◆日程

令和元(2019)年9月13日(金)～9月15日(日)　2泊3日

◆参加者（合計10名／男性6名・女性4名）

青山学院大学	地球社会共生学部	1名（4年男子）
慶應義塾大学	法学部	1名（4年男子）
東京富士大学	経営学部	3名（3年男子、2年男子、2年女子）
日本大学	経済学部	4名（3年男子、3年女子3名）
横浜国立大学	教育人間科学部	1名（4年男子）

◆プログラム

日	時	内　容
1日目 9月13日（金）	13:00	市川三郷町役場集合、オリエンテーション
	13:50	印章づくり体験・ヒアリング
	15:30	小学校見学・コミュニケーション囲碁 (市川東小学校)
	17:15	食事・入浴（みたまの湯）
	19:30	水明荘到着⇒花火、ヒアリング等準備
2日目 9月14日（土）	8:20	朝食後、水明荘出発
	9:00	【フィールドワーク】 ◎農業の現状を知る　シャインマスカット農家・農協共撰所
	10:40	◎移住・暮らしの現状を知る　古民家見学・移動販売ヒアリング
	12:00	昼食
	13:00	◎伝統工芸を知る　機械和紙の工場見学・ヒアリング
	14:00	花火屋タチカワ（はなびかん）
	14:30	まち歩き（旧街道のまち並み、商店街等）
	15:00	【グループディスカッション】 ◎学びの共有　◎ビジネスプラン作成
	17:00	入浴（みたまの湯）
	18:10	夕食、地域の方との交流会（ちかはぎ空の家）
3日目 9月15日（日）	9:00	プレゼン大会(市川東小学校)
	12:00	昼食、振り返り会
	14:00	マスコミ歌舞伎文化資料館⇒自由解散

2. 主催者からのメッセージ

プロジェクト実行委員会
市川三郷町　農林課農林係
係長　塩島 実

9月13日、大学生を迎え入れる日の朝、一本の電話が鳴った。猪が檻で捕まったからすぐ何とかしてほしい。猟友会の方に連絡するも連絡がとれない、さて困った。

午後から10人もの大学生が東京から来てくれるのに会場準備がまだできていない…。

反射的に猪を処理する行動をとった。自然の豊富な日本ではどこでも起こっている問題、決して、ここ市川三郷町だけではない。処理をして、タイトな2泊3日がはじまった。

「わがまち魅力化プロジェクト」の趣旨は、都市部で生活している大学生が過疎の町に滞在し、地元の住民や事業者との交流やフィールドワークを通じて、地域の魅力や課題を考えるというもの。今回、町内の様々な地域資源について、参加学生に見聞・体験してもらった。タイトなスケジュールで、参加学生は大変だったと思う。参加学生には、実際に見聞きしたことから、「地域商社」という立場になって、市川三郷町をさらに魅力的にする事業プランを考えてもらった。プレゼン大会当日の大学生はとても頼もしかった。前日は朝3時、4時まで検討をしていたそうだ。プレゼンの内容も非常に面白かった。

受け答えもしっかりしていて、さすがよく考えているなあと感じたよ。

そんな大学生にはこんな言葉を贈りたい。「1＋1は2でなく、4にも6にもなる」。ある人は僕に教えてくれた。恥ずかしながら40歳過ぎるまで全く何のことかわからなかった。もちろん主語もないし、何のことを言っているかも説明不足なんだけど、今の僕ならよくわかる。きっと、8にも10にもなると思っている。大学生にこの問いをプレゼントしたい、優秀な君たちならもっと早くわかるかもしれない。その問いの答えを見つけてほしい。見つかったその時は、すばらしく成長した君たちがいると思う。

市川三郷町に来てくれて本当にありがとう。交流するのはむしろ苦手なんだけど、そんな気持ちでいるよ。来年も、再来年も口下手で説明も得意ではないけれど、大学生が来てくれるだけで、町には新しい風が入る。大人のしがらみや社会のしがらみは、そんな簡単に解決しない。自分の思う通りになることの方が少ないけれど、自分のスイッチを、自分で見つけてほしいと思う。そのスイッチは40歳で見つかるかもしれない。70歳かもしれない。いくつになってもそのスイッチを見つけてほしい。だって、見つからないままの人もたくさんいるのだから。スイッチを見つけた時がスタートだよ。

君たちの今後の活躍をお祈りするよ。頑張って！

最後に、市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトに参加してくれた大学生、ご協力いただいた地域の皆様、東京富士大学・渡辺先生、日本総合研究所、そして関わっていただいた全ての皆さまに感謝申し上げます。貴重なお時間をありがとうございました。

II. 大学生からの提案

1. 職人の町 市川三郷町

のっぷい株式会社(Aチーム)

1.課題

私たちがこの三日間を通して感じた市川三郷町の課題は四点あります。

一つ目は花火、印章、和紙といった日本一の産業や農作物(のっぷいの野菜)など、沢山の観光資源がありどれも魅力的であるにもかかわらず、各々の魅力が強いが故にどれもバラバラに主張しているように見え、町のイメージを一つ挙げようとすると、これ!といったイメージがなく、複雑で漠然としているように感じました。

二つ目は先ほども記したように、市川三郷町には国内にも、海外にも通用するような魅力的な観光資源を持っていると感じましたが、その価値をうまく発信できる体制が整っていないのか、認識不足なのか、PR不足であると感じました。

三つ目はフィールドワークを通して外を出歩くと、空き店舗や閑散とした商店街が目立ちます。商店街でお店を構えている方にお話を伺った際には、「昔は賑わっていたが、最近は人も少なく寂しい」と仰っており、こういった空き家、空き店舗を何か活用できないかと考えました。

四つ目は多くの観光スポットがあるものの、それらが点在していたため観光スポット間の移動が長いことです。交通手段が限られた中で観光客が足を運ぼうとなると難しい点が多いのではないかと思いました。

2.方針

そこで、先の四つの課題から私たちはまず個々の観光資源同士を一つの中核となる価値観でまとめ、町を誰もがよりイメージしやすいものにしようと考えました。また、そのイメージに合ったPR活動の中でこの町で有効に活用できていない土地を利用しようと思いました。そしてその中核となる価値観として、各々の産業には、そこに息づく職人たちの熱い想い、高い技術力、伝統があると考え、「市川三郷町で職人と人と想いが繋がる、〜職人の町 市川三郷町〜」というブランドを確立しようと考えました。

3.提案

我々が提案するビジネスプランは、「市川三郷町職人街」です。現在、人通りが少なくなってしまっている中央通り商店街に、市川三郷町にある伝統産業を集めるというのが具体的な取り組みです。空き家や空き店舗を利用して、一つの産業につき一つの体験工房を作り、花火、和紙、印章、農作物(のっぷいで育ったもの)といった伝統産業に関する体験を職人の方々のご指導の下、提供したいと考えています。中央通り商店街という1つのスポットで、市川三郷町内に点在する様々な伝統産業に触れることができ、職人の方々と交流を深めることができるような施設を運営したいと考えています。

4.背景

このような取り組みを考えた背景には、二つの既存の問題点があります。一点目は、町の中に多くの伝統産業に触れられる施設があるにもかかわらず、それら一つ一つのスポットが非常に離れた位置に点在しているという問題です。二点目は、それらの施設に足を運ぶのに、交通手段が限られているという問題です。電車で訪れた観光客が施設に足を運ぶ場合、駅からはタクシーかレンタカーを利用する必要があります。しかし、タクシーの台数は十分でなく、車を運転することができない人も多いことを考慮すると、アクセスの難しさによって観光客を逃してしまう可能性があるのではないかと考えられます。そこで、それらの施設を駅の近くのアクセスしやすい場所に集合させたらよいのではないかと考えました。

5.ターゲット

このビジネスがターゲットとする国内の顧客層は、山梨県内、県外からやって来る幅広い年齢層の観光客ですが、その中でも特に、ファミリー層へのアプローチが効果的ではないかと考えられます。印章づくりや和紙のクラフト体験では、職人の方々と観光客の交流が深まるだけではなく、家族内でのコミュニケーションも促進されると考えられます。「家族で楽しみながら学べる体験工房」という側面を強調したPRが効果的であると思います。

また、日本の伝統工芸や職人の技術に興味を持つ外国人観光客もターゲットになり得ると考えられます。

6.PR方法

このビジネスプランの強みである、「一つのスポットで様々な伝統産業の体験ができる」という魅力を視覚的に表現したPR方法が効果的であると考えます。具体的な取り組みとして、中央通り商店街周辺を切り取り、体験工房の場所をポインティングした、「市川三郷職人街マップ」の作成を考えています。

7.体験工房の具体例

○花火について

市川三郷町の花火大会は有名ですが、打ち上げ花火だけでなく、手持ち花火にも花火師の方々のこだわりが見られることをより多くの人々に知ってもらいたいと思います。

そこで、花火の体験工房では、オリジナルの手持ち花火づくりを行いたいと思います。花火師の方々の指導のもと、色や火薬の種類を調整し、自分ならではの花火を作る体験を提供したいと考えています。

○農作物について

大塚人参や甘々娘(とうもろこし)、レインボーレッド(キウイ)など市川三郷町特有の土壌である「のっぷい」で育った農作物の珍しい形や色、味を伝えたいと考えます。実物を見て味わってもらうため、ジャム作り体験などを考えています。

○和紙について

市川三郷町での和紙もまた、障子紙の生産量が日本一であるほどの伝統的な産業で、最近では和紙を使った、ユニークな商品を開発する動きがみられました。今回はそのような和紙を使った新しい製品―例えば、和紙の椅子、和紙のハンモック、和紙を使った照明やランタンなどを、和紙の魅力に気づく入口として店頭に並べることを提案します。

○印章について

オノオレカンバの木材を使った、職人さんの指導によるハンコづくり体験を提案します。昔の漢字の形は面白く、わくわく感が感じられます。また、漢字の成り立ちを追いながら子供の教養を深めることもできます。

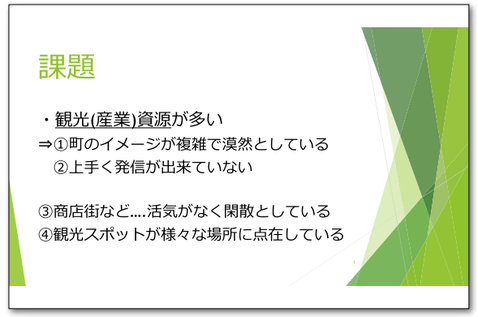
8.メリット

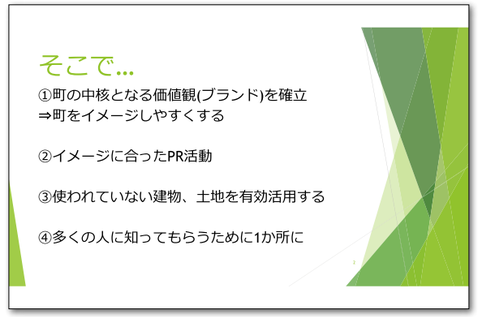
私たちが考えるこのビジネスにおけるメリットは四点あります。

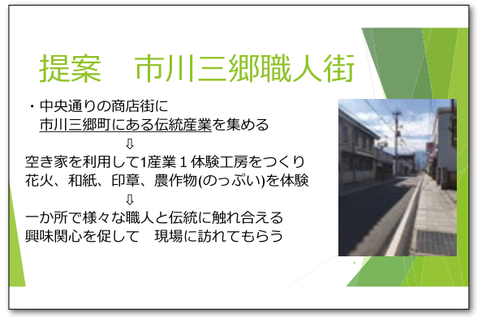
①職人の方々には新鮮だと思われる、消費者の生の声が聴ける
②新しい商品や試みを行う実験の場として利用することができる
③中央通り自体が観光名所化することで、観光資源のPRになる
④この商店街をきっかけに、実際に工場や農作地に足を運んでもらえる

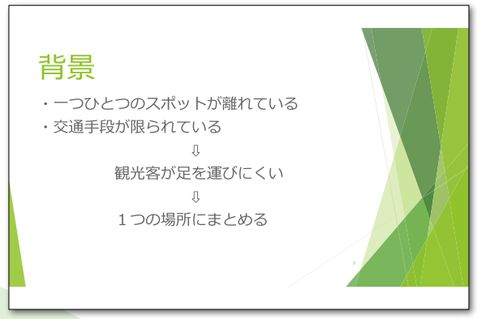
9.今後の展望

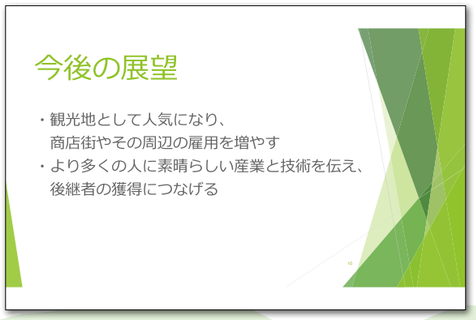
今回のプロジェクトの課題として「高齢化」「過疎化」というものがあります。そこに対して、まず市川三郷町が観光地として人気になり、産業が発展し、商店街やその周辺の地域の雇用の増加を見込んでいます。そして、その技術や魅力を子供や外国人をはじめとする観光客に伝えることは、後継者の獲得にもつながると考えます。また、今回は伝統的な産業の職人のみにスポットを当てましたが、新しい産業の職人たちもその商店街をきっかけに誕生することも願っています。











2. 市川三郷町芸術祭
山と伝統文化の「悦び」の町

株式会社YOROKOBI（Bチーム）

私たちは三日間で市川三郷町の様々な場所を訪問し、地域の方々のお話をお聞きすることができました。農業、観光、伝統工芸、移住などトピックは多岐に渡りましたが、チーム内で自由に各人が感じた課題を共有していたところ、Bチームは主に観光分野において共通の課題意識を持っていることが分かりました。「花火、夜景、温泉、体験農家。こんなにも観光資源が豊富なのに観光がイマイチ元気ないのはなぜだろうか」。このような共通の課題意識を分析してみたところ、二つの具体的な課題が浮き出てきました。

一つ目は、「市川三郷町の観光全体のコンセプト・ストーリーが弱い」ということです。一個一個の観光資源は大変魅力的なのに、それらを一つにまとめ上げ、外部に発信していくコンセプト・ストーリー性が弱いため、人々が市川三郷町の観光を魅力に感じてくれず、興味を持ってくれないのではないかと感じました。

二つ目は「観光を支える公共交通機関がない」という点です。個々の観光地を結ぶような交通機関が存在せず、観光しようと思っても、レンタカーを借りるくらいしか町を回る方法がなく、実際に「観光」という行動を起こすうえでの障害となっているということです。

一点目の観光全体のコンセプト・ストーリーが弱い、という点についてですが、実際に市川三郷町のHPの観光情報を見ても、観光全体を捉えやすくするためのコンセプトやストーリーが記載されておらず、いまいち市川三郷町の観光には何があるのか見えてきません。したがって、この課題を解決するには、A.観光全体のコンセプトを作成すること、B.必要であればそのコンセプトに沿った新たな観光コンテンツを作ること、が必要であると考えました。

二つ目の観光を支える公共交通機関がない、という点については、昔は公共バスがあったが、予算の問題や使用者減少の問題で、なくなってしまったというお話を地域の方から聞きました。観光資源を一カ所に集中することも一つの解決策と考えられますが、夜景のように移動できない物もあるので、やはり観光客を移動させる公共交通機関が必要と考えました。

そこでこれらの観光課題を解決するものとして、Bチームは期間限定で市川三郷町で芸術祭を行うことをご提案いたします。

芸術祭とは、地域の資源を活用した芸術作品をアーティストに制作してもらい、一定の期間、作品を市川三郷町一帯に点在させ、観光客に芸術作品および観光地を回ってもらうことで、観光客の地域観光を促進する祭りのことです。草案ではありますが、スライド右図（10ページ、右列上から3枚目）のような形で運営していくことを想定しております。このように芸術祭を開催することで、市川三郷町の抱える観光課題を解決することができると考えます。まず、観光コンセプトの作成に関しては、実際に作成するだけでなく、現在非常に高い関心を集めている芸術祭という型を通して幅広い人々に発信することができると考えています。また観光コンテンツ再編に関しては、既存の観光地に加えて、地域の観光資源を活かした芸術作品を追加して展示することで、よりコンセプトに沿い、人々が楽しめるような観光コースを作り上げることができます。公共交通機関に関しては、芸術祭の期間限定で、観光客を主なターゲットとして運行することで、採算がとれるのではないでしょうか。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、地方芸術祭は現在非常に流行っており、様々な自治体が実施しているものでもあります。この図（10ページ、右列下から1枚目）は、2019年に行われた芸術祭を、横軸を展示内容が「伝統芸術より」なのか「現代芸術より」なのか、縦軸を海の自然を活かしているのか山の自然を活かしているのか、としてマッピングしたものです。図にある通り、全ての芸術祭は現代アートによるインスタレーションを中心としたものであり、市川三郷町の観光資源を活かして実現できる伝統芸術よりの展示を中心としたものはないと言えます。

したがって、展示内容において、他の芸術祭とは差別化を図ることのできる伝統芸術中心の芸術祭を市川三郷町で開催することができると考えます。市川三郷町芸術祭の事業詳細を説明致します。最初に、コンセプトは「山と伝統文化の『悦び』の町」です。豊かな山と伝統文化を誇る市川三郷町で、日本の人々が自然や伝統文化に対して感じてきた「悦び」の感情を芸術作品を通じて味わい、改めて日本の自然・伝統文化を捉え直す観光型総合芸術祭をしたいという願いからこのコンセプトにしました。

続きまして、ターゲットは日本の伝統文化や自然をアートを通じて感じたい20～40代の方々、観光モデルは都内からの日帰り旅行としました。さらにロゴ説明をします。緑の三角形は豊かな自然の山を表します。山の中にある赤いものははんこの篆書体で市川三郷町と書いてあります。山の下のものは色々な芸術作品が点在している様子と喜びの感情をイメージしたものであり、それらが山に凝縮したことを表します。

作品の例として考えたのは、マスカットの木にブドウに見立てた和紙と電飾を吊るしたものです。これはシャインマスカットの農家さんを訪問させていただいた時に思いついたものですが、マスカットの木の下は葉で太陽が遮られるので、昼間でも薄暗く、明かりを組み合わせるには最適だと考えました。さらに和紙の素材を使うことにより、柔らかい光を演出することができます。まさに市川三郷町の自然と芸術を使った作品です。

他には、みたまの湯で夜景も見ることができましたが、その美しい夜景をバックに歌舞伎を上演したいと考えました。市川三郷町は市川団十郎発祥の地でもあるので多くファンの人も呼べますし、市川三郷町に足を運んでもらえる良い機会になるのではないかと考えました。

ちかはぎ空の家での宿泊から着想を得て、和紙をスクリーンにして影絵を上演したいと考えました。一つ目に提案した作品と同じく和紙と明かりの組み合わせですが、古民家の自然をじかに感じられるところに魅力を感じ、人間の体を使った影絵という自然のアートと融合させたら面白いのではないかと考えました。

また、せっかく日本一の印章の技術があるのだから、スタンプラリーで手彫りのはんこを使いたいと考えました。スタンプラリーによって普段なかなか観光客が来ないところにも行く機会ができたら、もっと町の魅力を知ってもらえるのではないかと思います。

さらに、その他の企画を3つ考えています。

1つ目は、祭りの期間中に各観光地、芸術作品間を結ぶ循環バスを運行する企画です。

2つ目は、体験で収穫したのっぷいブランドの野菜をランチやディナーに使用してお腹も心も満たす企画です。

3つ目は、山で芸術作品を鑑賞し、みたまの湯で汗を流して頂き、夜景歌舞伎を楽しんでいただける企画です。

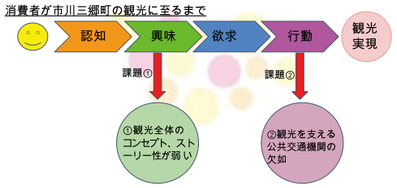
観光分野でのご提案
：市川三郷町芸術祭
「山と伝統文化の『悦び』の町」

㈱YOROKOBI

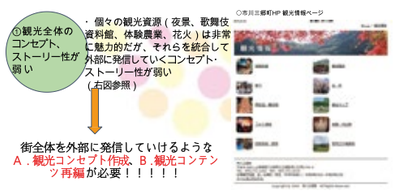
①フィールドワークを通じて感じた課題

①観光分野における２つの課題

消費者が市川三郷町の観光に至るまで



①観光全体のコンセプト、ストーリー性が弱い



①観光を支える公共交通機関の欠如

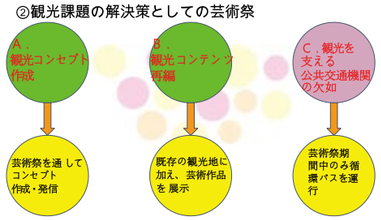
②芸術祭事業概要

②芸術祭とは

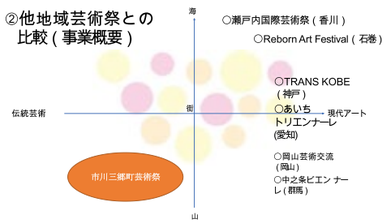
地域の資源を活用した芸術作品をアーティストに製作してもらい、一定の期間、作品を市川三郷町一帯に点在させ、観光客に芸術作品および観光地を回ってもらうことで、観光客の地域観光を促進する祭り。

芸術作品は絵画、オブジェ、演　劇、音楽、映画など様々なカテゴリーを含む。

②観光課題の解決策としての芸術祭



②他地域芸術祭との比較（事業概要）



③事業詳細

③芸術祭コンセプトとストーリー

市川三郷町芸術祭
コンセプト
「山と伝統文化の『悦び』の町」

ストーリー
豊かな山と伝統文化を誇る市川三郷町で、日本の人々が自然や伝統文化に対して感じてきた『悦び』の感情を芸術作品を通じて味わい、改めて日本の自然・伝統文化をとらえなおす観光型 総合芸術祭。

③芸術祭コンセプトとストーリー

市川三郷町芸術祭
コンセプト
「山と伝統文化の『悦び』の町」

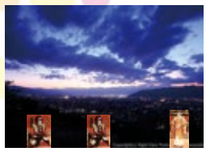
ターゲット
日本の伝統文化や自然をアートを通じて感じたい20～40代

観光モデル
都内から日帰り旅行

③芸術祭展示作品例

和紙製マスカット提灯のライトアップ

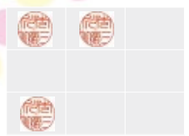
市川三郷町の夜景を背景に歌舞伎を上演



③芸術祭展示作品例

空き古民家での影絵上演

はんこによるスタンプラリー



③その他企画

・祭り期間中、各観光地、芸術作品間を結ぶ循環バスを運行
・ランチやディナーはのっぷいブランドの野菜を使用、収穫体験もあり
・順路は、山で芸術作品鑑賞
→ みたまの湯→夜景歌舞伎

④まとめ

・市川三郷町の地域活性化のきっかけとしての観光分野
・観光分野の抱える課題として①個々の観光資源を統合し、発信する観光コンセプト・ストーリーの欠如②個々の観光地間の移動手段の欠如
・課題解決のためには、①観光コンセプト作成②観光コンテンツ再編③公共交通機関、が必要
・市川三郷町芸術祭「山と伝統文化の悦びの町」の開催により、観光の抱える課題を解決し、観光を促進する

3. クセが強い町 市川三郷町

のっぷい産業(Cチーム)

私たちは市川三郷町の課題を「町に一体感がない」ということに定め、その課題を改善することが出来る糸口を提案してみたいと思います。まず、なぜ市川三郷町に一体感が見られないと思ったのかについて話したいと思います。私たちは市川三郷町に滞在し、多くの地域資源を見ることができました。例えば、印章、花火、果物、景観など多くの魅力ある資源がこの町にはありました。それらの資源を支えている町民の方たちは情熱を持っており、個々の資源は外部のものと比較しても劣らないものばかりでした。しかし、「それらはそれぞれ独立している印象」を持ちました。町民からのヒアリングでも、私たちが感じていたようなことを聞けたため、これがこの町の課題の一つだと考えました。そこで、私たちが提案するものは「観光ツアーによる個々の資源の一元化および町の一体化の強化」です。

提案するツアーのターゲットは大きく分けて二つあります。一つ目は大学生や高校生です。具体的には大学のボランティアセンターや研究機関と協力します。二つ目はシニア層です。ツアーを組んで募集をするという形ではなく、ある一定の人数がいる中規模団体に向けて販売します。具体的には町内会や自治会、老人会などです。

学生をターゲットにした具体的なビジネスプランとしては、勉強を中心としたスタディツアーを提案します。学生なので目で見て学習するというよりも、実際に花火やキャンプを体験することで、体験したからこそわかる発見や魅力、市川三郷町は「こんなに楽しい所だ」という事を私たちと同じように知ってもらいたい、という想いがあります。また市川三郷町の住民の方や役場の方とも一緒にツアーを行い、学生だけでなく現地の方々にも市川三郷町の魅力を知ってもらい、今後の課題や地方創生に関する事を意見交換して、お互いに刺激や気づきを与えられるようなツアーにしたいと考えています。

シニア層をターゲットとした具体的なビジネスプランは、市川三郷町のいいとこ取りのスポットをパッケージ化したものを提案します。市川三郷町には良質な伝統産業や農作物などが多く、シニア層が旅行する場所に非常に適していると考えました。また、シニア層ならではの口コミ力を生かし、シニア層同士の横の繋がりはもちろんの事、家族などの縦の繋がりも生かし市川三郷町の魅力を沢山の方に広げていきたいと考えています。

このプラン提案の意義とは「市川三郷町ブランド」を確立するうえでの必須事項である各地域の一体感の強化にあります。市川三郷という町を将来的に一つのブランドとして外部へ発信するためには、まず各地域が一枚岩になり同じ志を持つことが重要です。各地域がそれぞれの資源をお隣さん感覚で見てしまっている現状から脱却する。私たちのプランはその第一歩、ベイビーステップとなるものです。

もちろん、このプランにも解決しなくてはならない問題点があります。宿泊施設の拡充、人材の確保等があげられます。空き家を使用することが難しい、地方はどこも人手不足といった理由がありますが、解決できれば古民家宿泊施設、雇用先の拡充といった利点も生まれると考えます。

私たちが提案する観光ツアーは観光だけに留まるものではなく豊富な資源の一元化、それによる町の一体感の強化を目標とし真の意味での「市川三郷町ブランド」を実現するための足がかりとなるものです。

コンセプト

- 市川三郷町→**クセが強い町、市川三郷町。**
  - 季節を感じる多種多様な作物、豊かな天然資源、伝統に裏打ちされた伝統工芸の数々・・・
  - 町内の各地に誇れる地域資源があり、個々のクオリティーが高い！

市川三郷町の課題

- **町に一体感がないのではないか？**
  - 個々の地域資源のクオリティーは素晴らしいものなのに、それぞれが独立している印象を受けた。

提案

観光ツアーによる個々の資源の一元化
および
町の一体化の強化

提案

- ターゲット
  - **大学生や高校生**
    - 大学のボランティアセンターや日本総研のような研究機関と協力する
  - **シニア層**→個人の観光客ではなく、中規模団体を誘致する
    - 例：各町内会、自治会、老人会など

具体的なビジネスプラン

- 学生のスタディーツアー（夏プラン）
  - 期間：二泊三日
  - 参加人数：10名程度

＜1day＞
- 13:00　桃の収穫体験&実食
- 15:00　ハンコの体験&資料館見学@六郷
- 17:00　ホームステイ

＜2day＞
- 10:00　和紙の体験
- 12:00　お昼
- 13:00　花火工場見学&購入
- 15:00　温泉@みたまの湯
- 17:00　キャンプ@四尾連湖&花火

＜3day＞
- 10:00　振り返り（役場の方々と意見交換&フィードバック）

具体的なビジネスプラン

- **学生**
  - 体験重視のスタディーツアー
  - 外部の若年層と現地の人が交流することで、お互いに刺激を受ける狙い？

具体的なビジネスプラン

- シニア中規模団体向けツアー（各町内会向け、夏プラン）
  - 期間：一泊二日
  - 参加人数：10名程度

＜1day＞
- 13:00　和紙の染め体験
- 15:00　ハンコの資料館見学&購入@六郷
- 17:00　温泉@みたまの湯

＜2day＞
- 10:00　花火資料館の見学

具体的なビジネスプラン

- **シニア層**
  - シニア層特有のタテとヨコの繋がりが、市川三郷町の魅力の和を広げる。

この提案の意義

- 「**市川三郷町ブランド**」の理念を実現するためには、**市川三郷町の中にある各地域が一枚岩になる必要性**がある。
- 私たちの提案は、市川三郷町が将来的に一つのブランドとして外へ発信していけるための**ベイビーステップ**である。

このプランを実現させるために克服すべきこと（課題）

- **宿泊施設の拡充**
  - 空き家問題
  - 土地利用の許可
- **人材確保**
  - 官民学の連携強化

まとめ

観光ツアーによる個々の資源の一元化および町の一体化の強化を通して、
各地域が結束した「市川三郷町ブランド」を実現する土台を作る！

III. プロジェクトを振り返って

1. 学生たちの感想

Y.I.

いつもの日常生活からかけ離れて、初めての経験だらけだったので、新鮮で興味深い時間を過ごすことができました。そのため、刺激的で考えさせられることが多くあり、新しい知識や今の自分に足りない点を知るきっかけになりました。短い時間でしたが、グループワークや分析など、いい経験になり、今回のプロジェクトに参加してよかったと思っています。プロジェクトで得たことを踏まえて、これからの人生や勉学に活用していき、日々成長していきたいと思いました。

K.I.

去年も日野町魅力化プロジェクトに参加して、とても良い機会だったので、今回も参加させていただきました。去年は少し先輩方に頼りすぎてしまった面もあり、なかなか自分から動くことができませんでしたが、今年はみんなと意見を交換しながらプランを立てられたのではないかと思います。市川三郷町は素晴らしい芸術があることを事前に調べていたので、今回のプランでそれを生かすことができて良かったです。町の人が温かく、初めて来る人にとっても居心地のいい町だったので、もっと外の人にも魅力を知ってもらいたいと思いました。

M.I.

市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトに参加して、まずはこの様な機会を設けてくださった市川三郷町役場の方々、日本総合研究所の方々、そして暖かく迎えていただいた地域の方々に感謝を申し上げます。今回のプロジェクトに参加して、やはり1番印象に残ったことは、多くの人との会話です。地域の方々の生の声を聞けたこともちろんですが、他大学の人達と話すことで、同年代の人たちがこんな風に考えているのか、という新たな発見があり、とても刺激になりました。

プロジェクトに参加して、これから成長するために気づくことができたことがあります。それは、自分のこだわりや、考え、信念を持つことです。それに基づいた自信がなければこの先やっていけない、と強く感じさせられました。

R.S.

百聞は一見に如かずという言葉で表すにふさわしい3日間でした。人口減少や後継者不足、地域と行政のコミュニケーションなど、私が市川三郷町でみた課題の多くは、東京に住んでいながらも見聞きできる内容であったかもしれません。しかしながら、実際に地域の人々にお会いしその熱い思いに触れたことで、少しばかりではありますが、市川三郷町が抱える課題に対して当事者意識を持てるようになったと感じています。もっともっと地域の課題を知り、人々と議論してみたかったなぁとプログラムが終わって改めて感じています。考えるだけでなく、自分の目で見て感じる大切さを改めて学んだ3日間となりました。

K.N.

今回のプロジェクトで多くの町民の方と実際に出逢い、自然を感じ、工芸品を体験し、様々な事を自分の中に吸収することができました。市川三郷町にある個々の資源が想像以上に目を引くものばかりで驚き、また町の皆さんの仕事に対する熱量を感じ、フィールドワークを通して改めて、市川三郷町の地域創生に貢献したいと強く思いました。私達のプランが少しでもきっかけになったら嬉しく思います。今回は同じ目的を持った他大学の方々とも交流ができ、沢山の刺激を受け非常に有意義な時間を過ごせました。関わった全ての方に感謝しています、有難うございました。

K.H.

私は今まで日本の過疎地域に行ったことがありませんでした。過疎地域に対しては外部に発信できる地域資源が少なく、高齢化が進み活気がないという非常にネガティブなイメージを持っていました。しかし、実際に市川三郷町へ行ってみると想像以上に地域資源が多くあり、それらを支えている町の人たちは元気で情熱を持っていました。高齢化は実際にかなり進んでおり、歯止めをかけることは一筋縄ではいかないかもしれませんが、市川三郷町にある豊富な地域資源とそれを支える人々が一丸となって外部へ発信していけるものが出てくれば、過疎地域というネガティブなイメージが払拭されるのではないかと思いました。

Y.H.

3日間、非常に有意義で貴重な経験ができました。市川三郷町は自然や産業が豊かであるのはもちろんのこと、とにかく人の力が溢れる魅力的な町であると感じました。それを多くの方が知らないという現状は、市川三郷町に限らず日本の地方の課題の一つであると思います。今回提案したアイデアがその課題解決の手助けとなれば良いなと思いながら、アイデアを考えました。大勢の方の前での発表は緊張しましたが、実際に生活されている方々から具体的な意見をいただき、他チームの異なる視点やアイデアを見ることができ、自分にとって今後に活かせるプレゼンになりました。3日間有難うございました。

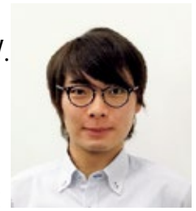
N.M.

短期間ではありましたが、今回のプロジェクトを経て自分と向き合う良い機会になったと思います。理由の一つは、プレゼン大会の途中で話す速度が速くなっていることに気付き、調節できたからです。また、印章づくり体験から始まりプレゼン大会までに多くのことを学ぶ機会をいただきました。豊かな自然に直接触れたフィールドワークや優しくて地元愛に溢れる市川三郷町の方々との交流が一番印象に残っています。便利な都会の生活に慣れてしまい、当たり前だと思っていたことが多かったですが、日々の生活に対する感謝の気持ちが芽生えました。

T.Y.

プロジェクトへの参加が2年目ということもあり、今回のプロジェクトでは前回の反省点などを改善して臨みました。チームとの連携、町民の方との交流、求められているものを迅速に理解すること。これらを意識する中で、町民の方々の現状を変えなくてはならないという強い意志を感じることができたのがとても嬉しく、強く印象に残っています。学生達を何の壁もなく受け入れ、提案を聞き、「何かしら取り入れて形にしていく」という言葉を聞けたことが活動をしていて何よりも嬉しかったです。非常に有意義で濃い時間を過ごさせていただけたことに感謝しています。

T.W.



高齢化や産業の後継者不足など、日本の地方では様々な問題が顕在化していると言われています。こういった現状はネガティブな論調で語られることが多いように感じられます。しかし、それぞれ志を持った仲間が集い、地域の課題を解決していくことは、創造的な楽しさに満ちた取り組みなのではないかと今回のプロジェクトを通して痛感しました。

仕事について熱く語る「職人」の方々、自分の町の好きなところを次々と挙げられる子どもたち、町の課題と魅力について多くのことを教えてくださった皆様。市川三郷町での出会いを大切にし、このご縁を発展させていきたいと思います。

コミュニケーション囲碁・サポーター

K.O.

今回、コミュニケーション囲碁のスタッフとして参加させていただき、色々感じることがありました。最初に会った時、小学生に対しても、大学生に対しても、お互い離れたところに住んでいることもあり、距離感を感じていました。しかし、簡単な囲碁をしながら、声もかけづらくなくなり、心を引き寄せることができました。その原因は、同じことをし、話し合えば、皆は実は一緒だ、と気づくことができるからだと思います。最後に笑顔で溢れている皆の顔を見て、これはたとえ年齢が違っても、国が違っても、変わらないことだと思いました。とても貴重な経験になりました。

注：個人情報保護の観点から
大学、学部、学年を記載せず、
名前をイニシャル表示にしています。

2. 町の皆様からの感想

プレゼン大会後、ちかはぎ空の家で。前列左から１番目が鈴木美樹さん

ここから始まる、新たな一歩

農泊ちかはぎ空（くう）の家
鈴木 美樹

本プロジェクトは大学生が町内に滞在し、２泊3日という限られた時間の中、フィールドワークとディスカッションから地域商社として各チームがこの町の何をどう売り込むかをプレゼンするという企画でした。

まずはこの企画を市川三郷町で行ってくださった事を町民の一人として心から嬉しく思っております。本当にありがとうございます。

自分たちの中では「当たり前」な事の多くが都会の学生の皆さんの瞳を通し新鮮なものとして映った時、彼らはこの素材をどう味付けしてくれるのだろう。どんな道具を使ってどう調理し誰に味わってもらうのだろう。

築180年の古民家の宿で、地元のおばあちゃん、畑の兄ちゃん、町の社長さん、そして大学生のみんなが膝をつき合わせ囲炉裏を囲んだ時、この場にいる私たち全員が皆それぞれに大切に思う町の事、人とのつながりを同じ思いで共有できた気がしました。これが大切なんだ、と実感できた一瞬でもあります。

プレゼンで語ってくださった学生たちのきっぱりとした提案はどれも本当に見事で、町の魅力だけでなく問題点にまでも踏み込んでいました。

とりわけ、私はこの町で伝統工芸のアートフェスをするという企画に感激しました。「用の美」に焦点を当てたアートフェスはとても斬新ですし、世界的にも注目を集めそうです。

和紙、花火、印鑑と伝統工芸中心のこの町の持ち味をうまく生かしているだけでなく産業として栄えてきた町がそのまま観光としてもなり得るのではという可能性も秘めています。その二つが兼ね備えられることがこれからの社会では求められてゆくのだとも思います。

さあここからです！このご縁を大切に来年にどう繋げてゆくか、学生たちがまた訪れたいと思ってもらうために私たちは何をすれば良いのだろうか。市川三郷町「観光としての」新しい一歩がまた始まった気がします。

町民と学生が囲炉裏を囲んで交流

学生の成長を間近で感じる

市川三郷町地域おこし協力隊
星野商店　秋山 茂仁

私は、学生たちに2日目から同行しました。最初は大人しそうな印象でしたが、シャインマスカットの収穫体験で「収穫は3名限定！」ということで周りに遠慮しながらも手を挙げたり、金長特殊製紙株式会社での和紙づくり見学や花火資料館では熱心に説明を聞き自ら質問するなど、積極的に取り組んでいました。いつしか私も学生と同じような気持ちになって説明を聞いたり行動を共にしており、難しいテーマにみんなで取り組もうとする学生たちの気持ちの中に連帯感や協調性が生まれ、その感情が私に移ったのだと感じています。最終日のプレゼンではそれぞれが素晴らしい提案をし、課題を乗り切ったことで充実感と自信に満ちていました。この三日間でいろいろなことを経験し、困難をみんなで乗り越えたことで大きな成長があったと思います。学生たちにとっても非常に有意義なプロジェクトだと実感しました。

プレゼン当日は３チームに分かれて行われ、どのチームも素晴らしいプレゼンでした。

各チームに共通することは伝統工芸を軸に町内を再構築すること、観光ツアーやスタディツアー、芸術祭など幅広い年齢層をターゲットとして伝統工芸のブランディングを行うという点でした。これは市川三郷町の他地域と差別化できる最大の特色だと思います。これら伝統工芸をいかに組み合わせるかという点ですが、学生たちが各々感じた市川大門、三珠、六郷３つの町の連携不足が足かせになっていることは確かで改善しなければならない問題だと思います。

次回は地域おこし協力隊として初日から加わり、学生たちと多くの時間を共有してできるだけ同じ視点から問題点、改善点を探りたいのと同時に、移動販売を通じて高齢化社会の現状も踏まえて地域の抱える問題を一緒に考えることができればと思います。

町の未来への一手

金長特殊製紙株式会社
代表取締役社長　一瀬 清治

市川三郷町は、山があり川があり、伝統文化のある素晴らしい町だと思っています。しかし、その素晴らしさを十分に伝え切れていないのも現実です。金長特殊製紙株式会社は、なにができるのか。町の発展に協力しながら、自社も成長していきたいと思っていました。

当社は150年もの歴史がある和紙の製造工場です。製造工場とユーザーは少し距離があります。それをどのように変えていくのか。オープンファクトリーにするにはどうしたらよいのか。当社にとっても、今回のプロジェクトは未来への一手かもしれません。

今回、新しい視点をもつ学生の皆さんに来て、実際に目で見ていただくことができました。素晴らしいことだと思っています。手漉き和紙は見るチャンスは意外とありますが、機械漉きで、紙出しから見学するということは、なかなかできません。濡れた和紙を乾燥させる工程に移動する場面、皆さんに見学してもらいましたが、なかなかうまくいきませんでした（慣れていてもよくあることです）。そして和紙を使用して折り染めを楽しんでいただきました。折り染めを開いた時の感動、和紙に対する愛着が湧いたことでしょう。

夜の交流会にも参加させて頂きましたが、学生の皆さんは、市川三郷町の魅力化について真剣に真剣に討議してくれました。「若いって素晴らしい」と思い、日本の未来もお願いしてしまいました。

次の日、3チームの皆さんから町の魅力化についての提言がありました。それぞれのチームの皆さんが市川三郷町の長所短所を、短い滞在にも係わらず的確に捉えていると感じました。

現在、市川三郷町を訪れる人々は神明の花火大会なども含め約60万人（推測）。学生の皆さんの提言を生かし市川三郷町ブランドを実現すれば、きっと100万人を超える日が実現し、市川三郷町ブランドも独り歩きすることでしょう！

町民にとっても新たな発見、感動がある

星野商店
代表　星野 賀央

私は、素直に市川三郷町に若い大学生の皆さんが来てくださり本当に嬉しく思いました。プロジェクト途中からではありましたが、同行させていただき楽しく交流することが出来ました。

大学生の皆さんの視点からこの町の問題点や課題を的確に見出しそれぞれが感じた内容が町内に住む方たちとほぼ同じだったことが、プレゼンテーション内容を聞いている反応で分かったこと、自分自身が感じていたこととほぼ同じだったことに驚きました。感じている問題点に間違いがないことも実感出来ました。

的確な指摘ができる点はさすが大学で学んでいる学生さんだと思いました。それと同時に町内の住民では気づけない点も指摘していただき第三者の目、専門分野で学ばれている方の目は重要だと感じました。

それぞれの指摘や解決策を聞いて地域活性化につながる一筋の光が見えた気がします。また、同行させていただいたことで気づいた地域の資源にも改めて触れ、それぞれの魅力を実感したことは、“目から鱗”で感動すら覚えました。

大学生の行動力と実行力を目の当たりにし、改めてその重要性に気づきました。今回のプロジェクトのプレゼンテーションを無駄にしないよう地域の皆で手を取り合い地域の活性化を実行したいと思います。

町民全体で共有したいメッセージ

六郷印章業連合組合
望月 孝

実質2日間という短い間によく調べていたと思います。産業、観光、体験と多角的に見る・知る・学ぶ仕組みが学生にとっても良かったのではないでしょうか。地域を知るには地域の人とのふれあい・交流会での情報交換も大きかったように思えました。(私も参加したかったです！)

また、篆刻体験が最初のプログラムということもあったかもしれませんが、体験後、お二人が私のところに来て後継者の件で質問しましたが、ほかの学生も当日出席の組合員にももっと積極的に質問してもらいたかったと思いました。

地域をよくするには、外からの目、視点「よそ者、若者、馬鹿者」の力が重要といわれますが、今回の企画は私たちにとっても良い提案・アドバイスで、刺激になりました。プレゼンの中で、特に「個々は強いが一体感がない」、「市川三郷町ブランド」、「町の各地域が一枚岩になる必要」など、日ごろ感じている痛いところを突かれました。このことは町民全体で共有したいです。

このプロジェクトに参加した学生さん、日本総合研究所ほか関係者の方、有難うございました。

3. コーディネーターから

地域と人、「伝えたい」と「知りたい」の貴重な出会い

一般財団法人
日本総合研究所
研究員　髙野 祥代

私は「市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクト」チームの一員として、事前準備・企画段階から、参加学生向け事前説明会、現地での同行まで参画させていただきました。現在は、プロジェクト終了後に開催する参加学生たちの集まり「市川三郷町のっぷい会(仮)」を企画しています。

ここでは、プロジェクト後に参加学生と地域の協力者の皆様からいただいた声をもとに、プロジェクトの成功要因と、今後に向けた改善点を整理したいと思います。成功要因は、目的意識高く参加してくれた学生たちの姿勢と、呼応するように期待に応えてくださった熱量高い地域の皆様の力だと考えています。

1.「現地に行って、知りたい」目的意識の高い参加学生たち

今年の参加学生10名は、大学での研究領域は経済学、経営学、法学、社会学など様々ですが、それぞれの視点での問題意識からこのプロジェクトを通した目標を持って参加していました。そのため、事前説明会での資料をもとに自主的に町の情報を調べて当日を迎えました。また、現地でのフィールドワークでは、インターネットや資料では知りえなかったことを五感で感じとり、驚きや感動を共有していました。

最終日のプレゼン大会の学生たちの発表は、町の皆様から高評価をいただきました。それは、上述した学生個々人の吸収力の高さと、短時間で情報を共有し考えをまとめ上げるチームワークの賜物だったと考えています。

2.「町の魅力を伝えたい」心強い現地の協力者の皆様

参加学生たちの意欲にさらに火をつけてくださったのは、地域の皆様でした。今回のプロジェクトには、子どもから大人まで40名を超える方々が協力してくださいました。

まずは、市川東小学校の小学生たち、教職員の皆様に御礼申し上げます。初日の「コミュニケーション囲碁」のプログラムでは、小学生と参加大学生が「自分のまちの好きなところ」をお互いに話しながら、囲碁を通して交流しました。大学生よりも小学生のほうが圧倒的にパワフルで、存分に交流を楽しんでくれていました。「わがまち魅力化プロジェクト」の発案者である囲碁プロ棋士の故・安田泰敏九段によるプログラムを活用した地域の小学生と大学生の交流の場は、まさに性別・年齢・地域などあらゆる違いを超えて、楽しくふれあえる空間になりました。

そして、フィールドワークや交流会では農家の方、移住者の方、印章業・和紙製造業・移動販売等、事業者の方など幅広い方々のご協力をいただきました。学生が口を揃えて話していたのは「町の人が熱い」ということ。町に対しても、自身の仕事に対しても誇りを持ち、現状に満足せず行動する方々であふれていました。

3.今後に向けて

今後に向けた改善点は、全体のスケジュール設定と、より「生活者」視点での住民ヒアリングの充実、の２点にあると考えています。前者については、実質2日間のスケジュールで15以上のプログラムが盛り込まれたタイトさだったため「じっくり話を聞きたい部分もあったが余裕がなかった」という声もありました。後者については、住民の方と話すときは「仕事」「観光」等の視点で話すことが多く、「生活者」の視点での話をうかがう機会が限られていました。今後の実施に向けては、プログラムと実施期間のバランス調整と、一部分でもホームステイ等「生活者の視点で町の理解を深める機会」の検討余地があると考えています。

地域の方の感想にあるとおり、本プロジェクトは「はじめの一歩」。市川三郷町に住む人たちの手でより魅力的なまちをつくっていくため、今回の学生たちの声もぜひ生かしてほしいと思います。学生たちにとっても、課題や魅力と向き合い、関わりを持った町と今後どのように関係性を紡いでいけるか、最初の一歩を踏み出したといえます。私もコーディネーター役で共に創り上げた一員として、関係性を紡ぐお手伝いができるよう尽力いたします。

住民の感想と学生の成長を受けて

一般財団法人
日本総合研究所
特任研究員
黒田 秀雄

1.住民のアンケート結果から

市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトのプレゼンテーション大会への参加住民のアンケートは29部が回収できました。プレゼンテーションの開催時間が土曜日の午前中であったためか女性の参加者が少なかった点が残念でした。(参加者の内訳：男性22名(75.9%)、女性5名(17.2%)、不明2。)

図表１．参加者の性別・年齢別人数

		性別			合計
		男性	女性	無回答	
年代	20代	2	1		3
	30代	9	1		10
	40代	7	1		8
	50代	1	1		2
	60代	3	1		4
	無回答			2	2
合計		22	5	2	29
(割合)		75.9%	17.2%	6.9%	100.0%

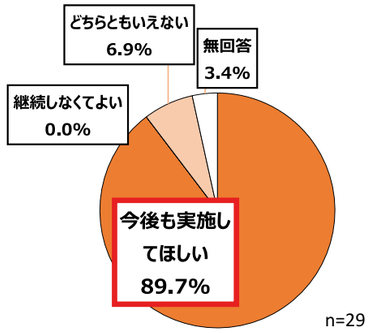
次にアンケート内容を個別に点検すると次のような結果になりました。

1)プレゼン大会に対する質問の中で、プレゼン内容に対する評価は、「とても良かった」と回答した方は27名(93.1%)、「まあ良かった」と回答した方は1名(3.4%)、残りの1名は不明。プレゼン大会にご参加いただいた地元の方々からは、大学生の真剣に取り組むプレゼンを大変高く評価していただいた点と、そのような結果は学生諸君の達成感と成長に、大いに繋がる点を、改めて感謝申し上げます。

2)次に、どのチームのプレゼンが良かったかとの質問では、Aチームとの回答者は8名(27.6%)、Bチームとの回答者は13名(44.8%)、Cチームとの回答者は7名(24.1%)、そして回答不明の人が1名。Bチームへの評価は高かったのですが、AチームとCチームの評価が特段低いわけではなく、地元住民の皆様の好みが反映した結果であると思われます。

3)最後に、このプロジェクトを今後も継続してほしいか、との集計では、「今後も継続してほしい」との回答は26名(89.7%)、「継続しなくてよい」との回答は0名、「どちらともいえない」との回答者は２名(6.9%)、不明が1名(3.4%)という結果となりました。「今後も継続してほしい」との回答者が圧倒的で約９割近くとなり、最初の質問のプレゼン大会への「とても良かった」の93.1%に近い割合でした。つまり、今回のプレゼンを見ていただいた住民の方々にとっては、市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトの学生たちが行ったプレゼンは、大変有意義なプログラムであったと思われます。

図表２．今後の継続実施についての意見



2. 学生たちのアンケート結果から

参加した学生は、もともと積極的な参加目的を持った学生たちだったので、市川三郷町のっぷい魅力化プロジェクトからの様々な体験学習の中から学びとる内容が多かったようです。地元の方々の仕事に対する思いや姿勢を感じ取り、将来社会人として彼らが活躍する時の糧になることでしょう。町の自然と文化、そして包容力のある住民の皆様への感謝を忘れることはないと思われます。地方に支えられる都会についての理解が進んだことと思っております。

プロジェクトの軌跡と今後の展望

一般財団法人
日本総合研究所
主任研究員
内田 誠一

「わがまち魅力化プロジェクト」は、2016年から大学の夏季休暇中に、継続的に実施してきました。プロジェクトの目的は、普段、都市部で生活している大学生が、少子高齢化や過疎化の問題を抱える地方のまちに滞在し、地域の方々との交流やフィールドワークを通じて、地域の魅力や課題を考え、地域活性化に資する事業プランを提案するというものです。これまでの3年間は、鳥取県日野町という人口3,000人のまちをフィールドに実施し、これまでに延べ30数名の大学生を派遣しました。そして、地元の方々の協力もあって、大学生から提案された事業プランのうち5案件が実現に至りました。

全国の地方自治体1,718団体のうち、「過疎市町村」とされる自治体は817団体(47.6%)を数えます(全国過疎地域自立促進連盟、2017.4.1現在)。この魅力化プロジェクトを全国各地に広めていくため、次なる実践活動のフィールドを探索していたところ、町役場の塩島実氏と出会い実現したのがここ、市川三郷町でした。

私が初めて市川三郷町を訪ねた時のイメージは、都心からのアクセスが良好で、伝統工芸や農産物、文化財や温泉といった地域資源・観光資源も豊富にある、しかしながらその知名度はというと…、という印象でした。それらの地域資源を有機的に絡めて、よりインパクトのあるプロモーションを行っていこうというのが、今回の参加学生3チームからの提案に共通する考え方ではなかったでしょうか。

参加学生にとって、実際に地方の生活環境に触れる経験、いろいろな方々との会話や交流は、自身の成長の糧となることでしょう。他方、町の皆様にとっては、プロジェクトを通じて、あらためて町のことを考える一つの機会になったのではないでしょうか。

よく、地域活性化には「ヨソ者」や「若者」の視点が大事だといわれます。本プロジェクトにおいて私たちは、都市部の大学生というヨソ者・若者と地域をつなぐ役割を担っています。ただ、実際に地域を変えていくのは、そこで暮らす住民や事業者の方々です。「住民自らが地域のことを考え、行動すること」、これが地方創生の前提だと思っています。魅力化プロジェクトは、そのきっかけづくりでもあります。

ぜひ地域住民の皆様には、これをきっかけに地域の気運を高め、地域を想う人たちの声を集め、住民同士の連携・協力体制を整えてもらえればと思います。そして、より魅力的で幸せを感じられる市川三郷町に向けて、自らの力(住民主体)で、一歩ずつ進めてもらえればと思います。事業者の皆様には、地元ならではの商品開発や事業展開のほか、住民の地方創生に向けた活動への積極的な参画に期待しています。そして、行政は、このような地域住民や事業者の活動に対するサポートをお願いしたいと思います。これからの市川三郷町を構想し、住民、事業者、行政が一体的に取り組むことが肝要です。

今回の魅力化プロジェクトでは、町立市川東小学校での児童と大学生の交流機会もプログラム化しました。2020年4月には、県立青洲高校が開校予定です。子どもや若者世代の郷土愛を涵養していくことは、我々大人の責任でもあります。国連が提唱した「持続可能な開発目標(SDGs)」は、持続可能な社会の実現のために、2030年までに達成すべき全世界共通の目標です。もちろん日本でも国を挙げて取り組んでおり、なかでも先進自治体はSDGs未来都市に選定され積極的に推進しているところです。今から10年後の2030年、またその先の未来を担っていくのは若者世代です。そのような若者世代が誇れる市川三郷町にしていきましょう。

東京圏(一都三県)で産まれる子どもの数は、全国の約30%。この数字は、今後ますます増加することが予測されています。つまり、地方の生活に触れたことのない、地方を知らない東京圏出身者が増えていくのです。今回の参加学生には、市川三郷町は思い入れのある大切な場所として、もっといえば第二の「ふるさと」として、きっと心に刻まれたことでしょう。

最後に、地域の皆様のご支援・ご協力によってプロジェクトを実施できたことに、あらためて感謝申し上げます。

【報告書記録作成】

東京富士大学 企業ビジネス研究同好会
一般財団法人 日本総合研究所

2019年10月31日発行